

朝鮮人鋳夫の動態に関する考察

——戦間期の筑豊における——

佐川 享平

目次

はじめに

一 朝鮮人鋳夫の概要

二 一九二〇年代の就労と移動

三 一九三〇年代の就労と移動

おわりに

はじめに

鋳夫は、戦前の在日朝鮮人にとって、「三大職種」(土工・職工・鋳夫)^①にも数えられる主要な職業であった。本稿は、日本最大の炭鋳地帯であり、早くから朝鮮人が多数就労した福岡県筑豊炭鋳を対象に、朝鮮人鋳夫の存在形態を移動のあり方から考察するものである。朝鮮人鋳夫に関するこれまでの研究では、朝鮮人鋳夫が活発な移動を展開したことは指摘されるものの、その移動が、どのような

構造の中で行われていたのかということは明らかにされてこなかった。本稿では、朝鮮人鋳夫が増加し始める一九二〇年代から、労働統制が強まり、朝鮮人鋳夫の性格も大きく変容する戦時期以前までを対象に、朝鮮人鋳夫の動態把握を目指す。

在日朝鮮人の移動というテーマは、これまで、植民地朝鮮―日本内地間の人口移動というレベルで主に論じられてきた。それは植民地朝鮮―日本内地間の移動が、在日朝鮮人社会の形成を促した事象だったためである。^② そのような関心からすれば、内地渡航後の朝鮮人が、内地内においても頻繁に移動した^③ という事実は見逃されるべきではない。内地へ仕事を求めて渡航した朝鮮人は、「職がなければ移動し、職の確保ができた場合にはそこに定住」^④したのであり、定着には就労先の確保が決定的に重要であった。つまり、朝鮮人の内地内での移動と定着は、その就労構造によって大きく規定されていたのである。

したがって、朝鮮人が就労した産業との関わりから、その内地内

での移動と定着を捉えることは、在日朝鮮人社会の形成における重要なプロセスを明らかにするものと考えるが、こうした関心からなされた研究には豊富な蓄積があるとはいえない。⁽⁶⁾そこで本稿では、朝鮮人労働者の移動状況が資料的に判明する唯一の産業ともいわれ、かつ、移動性の高かった鉱夫・炭鉱業を事例として取り上げることによって、移動と定着の地域的展開を明らかにしたい。

以上を踏まえ、本稿は課題として、第一に朝鮮人鉱夫の移動を規定する諸要因と移動パターンの析出、第二に朝鮮人鉱夫の移動に対する意識の解明、という二点を設定する。第二の課題を設定するのは、移動が政治的、経済的要因に強く規定されつつも、しかし、その範囲内において發揮されえたであろう、個々人の主体的な意思や判断力にも留意したいためである。方法としては、各種統計・調査資料によって把握される、マスとしての朝鮮人鉱夫の就労と移動の傾向を、炭鉱業の動向を踏まえつつ確認すると同時に、これを一人の朝鮮人鉱夫が実際にたどった軌跡と照応させ、分析を行うこととする。

なお、本稿の対象は鉱夫であり、検討する「移動」は炭鉱から炭鉱への移動に限定される。もちろん、鉱夫になった者が、内地に渡航して直ちに鉱夫になったとも、その後もずっと鉱夫であり続けたとも限らない。ある時点で、他の職種から、もしくは他の職種へ転職することも、朝鮮半島へ帰ることも、当然あり得た。この点を資料的に充分確認しえないことが、限定の消極的な理由であるが、一

方で、本論で述べるように、鉱夫であり続ける人々も決して少なくなかったのである。こうした限定によって捉え損ねる部分もあるが、本稿はさしあたり、鉱夫になり、また、鉱夫であり続けた少なからぬ人々にとって、いかなる就労と移動の経路が存在したのかを明らかにするものとしたい。

本稿では聞き書き資料を用いるが、これは「上野英信・聞き書きノート（戦前期筑豊炭鉱労働運動史）」に収められた、朝鮮人男性M（仮名）のものである。本資料は、筑豊を拠点に活躍した作家・上野英信が行った聞き書きの記録であり、一九七六・七七年頃、子息の上野朱氏によって、録音テープから大学ノートにおこされた。テープは劣化のため失われ、ノートの原本も散逸してしまったが、英信と親交のあった田中直樹氏が所持していた複製が、九州大学記録資料館産業経済資料部門に寄贈されている。この聞き書きには、「昭和元年ごろ」に内地へ渡り、その後ほぼ一貫して筑豊炭鉱で就労したMの足跡が、粗密はありつつも通時的に語られる点で、極めて貴重な資料といえよう。もちろん、個人に固有な経験を、直ちに朝鮮人鉱夫全体へと敷衍することはできないが、本稿は、朝鮮人鉱夫にとってあり得た可能性のひとつとして、Mという人物が選び取った道筋を位置づける作業ともなろう。

なお、本稿では紙幅の関係上、図表の使用を必要最低限にとどめたことをお断りしておく。

一 朝鮮人鉱夫の概要

本節では、福岡在留朝鮮人の就業構造における炭鉱業の位置付け、筑豊における朝鮮人鉱夫数の推移とその出身地について確認するとともに、朝鮮人鉱夫の就労パターンとその移動範囲について、予備的な考察を加えておきたい。

福岡県は、全国的にみても早くから朝鮮人の流入がみられた地域であるが、その要因は、朝鮮人を労働力として吸引する産業構造にあった。とりわけ、筑豊炭鉱業の吸引力は強く、戦前の福岡県在住朝鮮人の職業構成では、「鉱坑夫」が一貫して最大となっていた。⁽⁸⁾

朝鮮人鉱夫の数は、一九二〇年以降、福岡県単位での把握が可能となるが、この数字は筑豊炭田における朝鮮人鉱夫数とおおよそ同一の傾向をみせていると考えられる。⁽⁹⁾ 大戦ブーム期、労働力不足を補うために多くの炭鉱が採用を開始した朝鮮人鉱夫は、二〇年には二九〇〇名を数えた。二〇年代は、戦後恐慌による一時的な減少はあるものの以降は一貫して増加し、後半には六〇〇〇名を超えて一つのピークを形成している。その後、昭和恐慌期には大幅に落ち込むが、三三年以降、満州事変以降の好景気を背景に緩やかな増加傾向をみせている「表1」。なお、二〇～三〇年代におけるこのような朝鮮人鉱夫数の推移は、概ね、鉱夫数全体の増減傾向とも合致している。⁽¹⁰⁾

朝鮮人鉱夫の動態に関する考察

〔表1〕福岡県／筑豊朝鮮人鉱夫数の推移

	福岡	筑豊
20年6月末	2,900	
20年10月1日	2,553	
21年6月末	1,890	
24年11月1日	3,066	
25年6月末	5,374	
26年6月末	4,339	
27年	5,138	
28年3月	6,511	6,501
28年7月		5,626
30年6月末	6,813	
30年10月1日	6,490	
31年12月末	4,734	
32年12月末	4,140	
33年		2,421
33年12月末	5,586	
34年12月末	4,623	
35年12月末	5,432	
36年12月末	6,304	
37年12月末	6,165	
38年12月末	7,828	
39年12月末	22,722	
40年12月末	25,019	

出典) 20・30年10月1日：国勢調査、20年：内務省警保局『朝鮮人概況』、21年：同『朝鮮人近況概要』、24年：社会局『鉱業労働事情調査』、25・26年：同『在留朝鮮人の状況』、27・28年：福岡地方職業紹介事務局『管内在住朝鮮人労働事情』(1929年)、同『筑豊炭鉱労働者出身地調査』(1928年)、29～42年：内務省警保局『社会運動の状況』、33年筑豊：福岡地方職業紹介事務局『炭坑夫の出身地調査』(1934年)。

筑豊炭鉱に働く朝鮮人鉱夫の出身地は、一九二八年七月末時点の調査によれば、慶尚南道二二二二名、慶尚北道一六〇六名、全羅南道六五一一名、全羅北道四六七名、忠清北道二五一一名、京畿道一一九名、平安南道一一八名、他は一〇〇名以下となっており、地理的に近い朝鮮半島南部の出身者が多くなっていた。また、そのほとんどは男性であり、多くは基幹労働力として坑内労働に従事することになった。

次に、炭鉱に就労する朝鮮人の前職と退職後の行き先から、その就労パターンを検討しておく。朝鮮人鉱夫の前職に関する調査としては、一九二四年一月一日現在、福岡鉱山監督局管内主要六〇炭鉱における鉱夫の前職を取り纏めたものがある。それによれば、朝鮮人鉱夫の場合、その前職は炭鉱業(四五・四%)と農業(四

九・一%)がそれぞれ半数近くを占め、その他の業種から炭鉱業への転職は五・五%に過ぎなかった。⁽¹²⁾ 上記の調査では、前職に従事していた場所の情報はないが、二一年下半年期における福岡・佐賀・長崎三県の炭鉱に就労した者の「前稼動地」と前職に関する調査では、朝鮮半島で炭鉱業に従事していた者はいなかった。⁽¹³⁾ また、農業は、内地に渡航した朝鮮人の就労先としてはマイナーな職種であった。これらのことから、炭鉱に就労する朝鮮人は、朝鮮半島において農業に従事していた新規渡航者と、他の炭鉱から移動してきた内地既住者、という二者に大別されると考えられる。

このことはまた、ある炭鉱で鉱夫として働いた者が、退山後に別の炭鉱へと移動していたことを示唆する。その点について参考となるのが、二七年と二八年上半期に飯塚炭鉱(後述)を辞めた朝鮮人鉱夫の退籍事由調査である。理由の多数を占めるのは、「帰農又は帰国」と「他坑への転坑」で、この二項目で兩年とも全体の半数余りを占めている「表2」。⁽¹⁴⁾ その他のやや抽象的な事由については措くとしても、出稼ぎを終えて朝鮮半島に戻るか、引き続き内地で他の炭鉱に職を求めるかが、退職後の主要な選択肢だったのである(「転職」が1%に満たない点にも注意)。加えて、その他の事由、例えば「無断他行不帰」の離職者にも、実際の行き先が他の炭鉱であったものが含まれると考えられ、離職者のうち、少なくとも二〜三割、あるいはそれ以上の人々が、別の炭鉱へ移動していたと推定される。

〔表2〕 飯塚炭鉱朝鮮人鉱夫退籍事由調

種別	1927年		28年1～6月	
	人数	比率	人数	比率
業務上の都合	305	5.1	176	5.1
業務上身体傷害	58	1	32	0.7
私傷病	75	1.3	25	0.7
兵事	0	0	5	0.1
帰農又は帰国	1,381	23.2	1,016	29.6
坑則違犯業務怠慢	49	0.8	34	1
犯罪	1	0.1	0	0
逃走(貸金踏倒)	16	0.3	3	0.1
無断他行不帰坑	917	15.3	649	18.9
作業上の不平	8	0.1	8	0.2
对人的不平	2	0.1	2	0.1
家事の都合	1,430	24	751	21.9
転職	28	0.5	19	0.6
他坑へ転坑	1,675	28.1	698	20.3
其他	14	0.2	14	0.4
合計	5,959	100	3,432	100

出典) 27年：福岡地方職業紹介事務局『管内朝鮮人労働事情』(1929年)、28年：福岡鉱山監督局「朝鮮人鉱夫労働事情」(『石炭時報』5-1、1930年)。
注) 1928年については「某鉱業所」となっているが、出典資料の内容及び他資料との関係から飯塚のものとして推定した。

では、朝鮮人鉱夫が別の炭鉱に移動する場合、それはどの程度の範囲で行われたのか。この点については、朝鮮人に即して分析する材料はないが、筑豊における鉱夫の移動の多くは、同一炭坑内の比較的狭い範囲で行われていた。⁽¹⁴⁾ 朝鮮人鉱夫の場合にも、その移動範囲はおおむね筑豊炭田内であったと考えておきたい。

以上のことから、鉱夫となる朝鮮人の多くは、朝鮮半島南部の農村から渡航してきた人々であり、そのうち一定の人々は、筑豊炭田内で炭鉱労働に継続的に従事することになった、といえよう。

朝鮮人鉱夫の数は昭和恐慌期に大きく減少するが、この時期を境として、朝鮮人鉱夫の存在形態には大きな変化がみられた。そこで、以下、第二節では一九二〇年代の、第三節では一九三〇年代の就労

と移動の状況について、それぞれ検討を行い、各年代の特徴と変化を捉えることにしたい。

二 一九二〇年代の就労と移動

福岡県全体での朝鮮人鉱夫数の推移は先に確認したとおりであるが、一九二〇年代の人数がほぼピークに達した時期に、恐らく悉皆に近い規模で行われた二八年三月現在の調査から、炭鉱別の人数が把握可能である「表3」。それによれば、最大の雇用主は三菱鉱業で、筑豊鉱業所の四炭鉱合計で三四三四名を抱えていた。また、中島飯塚にも一七六八名が就労していたが、当時の飯塚は三菱の委託経営下にあった。これに続くのは、麻生商店経営三炭鉱の計三六〇名、貝島鉱業大之浦炭鉱の二二二名で、以上で福岡県全体の約八八%、五七七四名を占めることになる。このように、朝鮮人鉱夫は特定の炭鉱資本、二〇年代にはとりわけ三菱系統への偏在傾向が顕著であった。

さて、Mという一人の若者が、朝鮮半島から筑豊炭鉱へやってきたのは、朝鮮人鉱夫の数が増加していった「昭和元年ごろ」（二七頁、以下、「聞き書きノート」からの引用については頁数のみを表記）のことであった。まず、彼の素性を、語られる範囲で確認しておこう。渡航時期を一九二六年頃とすると、その時「満一五くらい」であったMの生年は、一九一一年前後と推定される。郷里の場

〔表3〕 筑豊・炭鉱（資本）別朝鮮人鉱夫数の推移

炭鉱(資本)名	1928年3月											1933年		
	朝鮮人鉱夫数					全鉱夫数			朝鮮人比率(%)			朝鮮人	全鉱夫	比率
	坑内	(女)	坑外	(女)	計	坑内	坑外	計	坑内	坑外	計			
三菱鉱業合計	2,977	0	457	52	3,434	9,367	3,425	12,972	31.8	13.4	26.4	548	5,650	9.7
中島飯塚炭鉱	1,687	1	81	2	1,768	4,687	1,114	5,801	36.0	7.3	30.5	361	1,300	27.8
麻生商店合計	254	13	106	50	360	4,435	1,157	5,592	5.7	9.2	6.4	1,088	4,989	21.8
貝島大之浦炭鉱	58	8	154	20	212	6,628	2,828	9,512	0.9	5.4	2.2	219	5,082	4.3
中小炭鉱合計	420	51	33	12	453							149		
その他	200	9	74	5	274							56		
合計	5,596	82	905	141	6,501							2,421		

出典) 福岡地方職業紹介事務局『管内在住朝鮮人労働事情』(1929年)、同『炭坑夫の出身地調査』(1934年)。全鉱夫数は『筑豊石炭鉱業組合月報』。

註) 中小炭鉱は28年: 8炭鉱合計、33年: 3炭鉱合計。中小炭鉱の区分については本文註18を参照。

所については触れられていないが、その家柄は、「人の土地を四反ばかり作りよったですもんね、そんでその、あの、人の土地を耕作したら米を何俵ずつとか納むる」(二〇頁) というものであった。また、渡航当時から多少の日本語については理解できた(「渡日当初は、以下、亀甲括弧内は引用者による」)日本語も都合良うは: アリガトウ、コンニチワぐらいしか、ま、学校も一年くらい行っちゃったから、なんぼか日本語知っちゃった」(三四頁)。彼は郷里で、既に内地に渡り、東京大崎町にいた従兄弟の存在や、友人から

聞く「かねもうけがいい」といった話から、内地への「あこがれ」を強めていった(三〇頁)。

そのMが内地へ渡り、また、炭鉱と関わる契機となったのが、三菱釜田四坑に就労していた従兄弟(大崎の従兄弟とは別人)の一時帰郷であった。「それがまたこんだ嫁さんをつんのうて行くつちゅうから、俺もつんのうて行け、ちゅうて」(三〇頁)、同行することにしたのである。彼は友人に二〇円を借り、従兄弟夫婦、および他の内地渡航希望者ら八人ほどで釜山へと向かった。しかし、釜山では水上警察署から渡航に必要な「証明書」の給付を受けることができず、立ち往生してしまう。

朝鮮人に対する朝鮮半島―内地間の移動管理は、一九年四月、警察の発行する旅行証明書を用いて開始され、二五年一〇月以降は、釜山水上警察署が労働目的の朝鮮人の内地渡航をチェックするようになった(無許可労働募集に応じ渡航する者、内地での就労が不確実な者、国語を解さない者、旅費以外の所持金一〇円以下の者、モルヒネ患者の渡航を認めず)。さらに二八年三月からは、これに地元警察署による釜山水上署宛紹介状(いわゆる渡航証明)の発給による制限が加わり、地元警察と釜山水上署による二重のチェック体制が敷かれることになる¹⁵⁾。また、内地に生活の拠点を置く朝鮮人の一時帰還に便宜を図る「一時帰鮮証明」の発給開始は二九年八月のことであり、それまではMの従兄弟のような一時帰郷者であったも、新規渡航と同様の手続きを要していた¹⁶⁾。

この時点で渡航を諦めた者もいたが、残ったMら数名は野上鉱業所の募集人との間を仲介する「ボス」¹⁷⁾密航ブローカーに手数料を払い、「ヤミ舟」で密航することを決意する(一・三一頁)。

博多港に到着したMらは、「科人みたいに」(三二頁)嚴重に監視され、野上山田炭鉱へと向かった。しかし、そこで待っていたのは、「仕事がなかったら、それこそ監獄と同じでしょ、この、大きな南京錠はめといて」(…)桜ん棒やらじゅうつとたてちやるですよ、ケツワル奴はこれでぶっ叩くんだちゅうて」(三二―三三頁)、という生活であった。

Mの渡航は正規の手続きを経ないものであり、筑豊の代表的な中小炭鉱資本であった野上鉱業所経営の炭鉱に就労することになった。こうした方法による鉱夫募集がどの程度行われていたのか、「密航」という性質上その把握は困難であるが、地理的に近い福岡へは多くの朝鮮人が労働目的で「密航」¹⁷⁾してきており、炭鉱への就労も無視し得ないものがあつたと思われる。しかし、一九二〇年代最大の雇用先である三菱鉱業では、正規の手続きを踏み、朝鮮半島での募集を行っていた(後述)。野上をはじめとする中小炭鉱¹⁸⁾には、八炭鉱合計で四五三名の朝鮮人が就労していたが、仮にもし、これらの中小炭鉱の朝鮮人鉱夫が全て密航によって就労していたとしても(実際には内地既住者も採用していたと考えられるが)、その規模は限定的なものにとどまったと考えられる。

野上山田のこうした環境に堪えかねたMは、二週間ほど働いた後、

「旧正月ごろ」の雪の晩、便所の天井の窓から逃亡する。逃亡したMは、「鯰田まで歩いたですよ、その、鯰田に私の先輩が来て三菱系統で働きよるから」(三四頁)。ここでいう「先輩」とは、先の従兄弟とは別の、郷里の知り合いだったようであるが、結局、鯰田には就労できなかった(三五頁)。そこで、彼は、やはり郷里の「友達」がいた麻生綱分炭鉱へ行き、その友達を介して朝鮮人飯場頭Iに志願、就労した。しかし、綱分での労働もまた、「坑内の、人間が歩んで下がる坑道がはげしいし、とつてももう、暑うしてですね、それに人間がボタかぶつて死んであがつたりしたらもう働こうことないですよ」(同前) というものであった。Mはここで二ヶ月就労したが、三菱鯰田五坑で採用があると知って応募、「セツトウとノミ持つて、岩のとこ行って孔をくらすと、試験」(三五頁)を受け、同炭鉱に移ることになる。

三菱鉱業では、長壁式採炭法と切羽運搬の機械化(水流切羽運搬法の導入)が早くから一体となつて実施され、従来の一先(男性先山―女性後山)編成の作業単位から共同採炭方式へと移行する過程で、女性後山の代替労働力として朝鮮人鉱夫が多数導入された¹⁹。この背景には、慢性不況と保護鉱夫(女性・年少者)の就業制限問題²⁰という、炭鉱業共通の課題があり、二〇年代には、保護鉱夫の排除を可能とするような技術的合理化がはられていった。かかる合理化は大手炭鉱と中小炭鉱との格差を拡大・確立する方向で跛行的な展開をとげた²¹が、中央財閥大手である三菱では、合理化が先行して進

められる過程で、朝鮮人鉱夫の導入が図られたのであった。

三菱鯰田での採炭夫としての仕事は順調で、Mは麻生や野上と対比しつつ、「おんなじ納屋頭おつても麻生系のほかのヤマよっかあん頃は三菱系統やったからですね、まあ良かったですよ」(…)給料面でもほかの麻生炭鉱よかジューツと良かった、「三菱系統には」(…)刺青なんかいた人は志願させません」(…)麻生系統とかね、ノীগミ「野上」ヤマとかですなそういうところは」(…)刺青いたら、…そんなわりもう顔に刀傷のいっちよるとやらあんなのばっかりおつた」(一―二頁)と、その労働条件・環境の良さを述べている。朝鮮人鉱夫の賃金に関する当時の資料は極めて乏しいが、三菱鯰田は朝鮮人鉱夫の平均賃金が他の炭鉱に比べて高く、Mの実感とも合致するものであった。

三菱経営炭鉱で行われていた募集方法は、朝鮮人の定員数を決め、欠員が出た場合には、在籍者の親類や知己を朝鮮半島からの呼寄せによつて充足する、手寄法・縁故雇入と呼ばれるものであった。その際には、「会社側より朝鮮何道何郡何面何某は本社何坑に坑夫として採用の予定にて本人は就職の為め内地に渡来する者に相違無之候に就ては渡航御許可相願度と記したる採用証明書を本人に送付し本人は之を原籍地の警察署又は駐在所の下付を受けて渡航」²³する、という手続きが踏まれたが、それは先述の渡航管理政策が要請するものであった。こうした募集方法は一方で、「内地在住並に筑豊其他の炭坑を流浪したる朝鮮人は可及的採用せぬ方針である」(…)

何分各地を流転して悪ずれがして居り、初渡航者に比し金儲の念薄く喧嘩や賭博等の悪習に染み、而も移動頻繁にして「…」特別に技量優秀で健全なる者でなければ採用される事は珍らしい⁽²⁴⁾、というように、内地既住者の採用に対する消極的態度と対応していた。従って、Mの就労は三菱に就労する朝鮮人鉱夫としては「珍らしい」ケースであったといえよう。

鯰田での就労は二〜三年の長期に及んだ(三四〜三五頁)。しかし、一緒に採炭作業に従事していた「相棒」が現場監督に逆らって辞めさせられ、そのおかりを受けて配置転換を迫られたため、鯰田を辞めることになる(二七〜二八・三五頁)。渡航時期や前後関係からすると、これは一九二八年頃と推定される。

ここまではMの足跡に即して述べてきたが、Mの就労しなかった中島飯塚・貝島大之浦の両炭鉱についても触れておこう。中島飯塚炭鉱では、二四年に経営者の中島徳松と三菱鉱業との間で委託経営契約が結ばれ、以降は三菱から派遣された職員が経営を行っていた。中島による炭鉱経営は大手炭鉱とは相当に異なるものであったが、三菱による合理化が徐々に進められる中で、朝鮮人使用の余地も拡大していったものと考えられる⁽²⁵⁾。しかし、この飯塚では、三菱とは異なる募集方法を採用していた。鉱夫の募集は会社指定の周旋人が行うもので、朝鮮では専任のもの一名に委嘱していたが、一九二七年に同炭鉱が採用した朝鮮人五六八名中五二五八名、翌二八年には五七七八人中五二三〇名が、内地で募集された人々であった。つ

まり、採用された大多数が内地在住者だったのである⁽²⁶⁾。また、地場大手の貝島では、大之浦第七坑の露天掘りに朝鮮人を集中的に使用していたところに特色があり、その募集方法は三菱に類似していた。

最後に、以上の各炭鉱でみられた解雇・雇入の状況を、一九二七年三月中について判明する一カ月の人数から確認する⁽²⁷⁾。貝島では、雇入三九名・解雇一七名(同月末在籍者数の約八%)と、離職者は少ない。一方、三菱の四炭鉱では雇入五三九名・解雇五九一名(同前約一七%)を数えている。一ヶ月の解雇者数に単純に一二を乗ずれば一年間で七〇〇名余りが離職したことになり、縁故雇入の実施にもかかわらず鉱夫の入れ替わりは激しかった。他方、主に内地在住者を採用する中島飯塚では鉱夫の流動性が極めて高く、雇入七五二名・解雇五六八名(同前約三二%)に上っていた。また、麻生商店経営炭鉱でも、雇入一三四名・解雇七八名(同前約二二%)となっており、やはり高い流動性を示していた。

第一節でみた、農村出身の新規渡航者か内地在住の鉱夫経験者か、という朝鮮人鉱夫のあり方は、各炭鉱の募集方法によって規定されていた。加えて、かかる募集方法の違いと朝鮮人鉱夫の流動性は、炭鉱から炭鉱への移動に、一定の流れを生み出していたと考えられる。すなわち、三菱に代表される、新規渡航者採用を主とする炭鉱から、中島飯塚のような内地既住の鉱夫経験者を採用する炭鉱への移動と、内地既住者採用の炭鉱相互間の移動である。麻生の募集方法については詳らかではないが、Mが志願して網分に就労した経緯

や、後述するように、その後Mが何度も麻生経営炭鉱に就労していることから、中島飯塚と同様、内地既住者を採用していたものと考えられる。

また、渡航後のMの行動からは、ネットワークを生かした移動の有様を看取することができる。移動する際に頼りとしたのは、先に働いていた先輩や友達などの知己であり、かかるネットワークとそこで得られる情報が、朝鮮人鉱夫の移動に重要な役割を果たしていたといえよう。⁽²⁸⁾ 加えて、Mは就労先を転々としつつも、その移動は一貫して三菱への志向性を持つものであった。Mの場合、三菱での労働条件についても、従兄弟等を通じてあらかじめ情報を有していたと考えられるが、かかる三菱志向は、よりよい労働条件を求めての上昇志向ともいえよう。結果、「珍らしい」パターンで三菱に就労したMは、朝鮮人が鉱夫として期待しうる範囲内において、佳良な労働条件で働く機会を得ることになった。

三菱鯉田を辞めた後、Mは筑豊から一時離れることになる。その理由については、「炭鉱よりそこ〔東京〕がいいような気がして」(二六頁)と語られるのみであるが、忖度すれば、他の炭鉱では三菱並みの労働条件は望み得ないとの判断のもと、東京で社会的上昇を遂げたいとの思いがあったのではなからうか。

三 一九三〇年代の就労と移動

一九二八年以降、朝鮮人鉱夫の炭鉱別人数が判明するのは、昭和恐慌を経た後の三三年である。⁽²⁹⁾ この調査は対象数が少なく、全体的な傾向を読み取るには不十分ではあるが、二〇年代に朝鮮人を使用していた主な炭鉱については、その推移をみるのが可能である〔表三〕。二〇年代と比較した場合の最大の変化は何より、三菱四炭鉱(五四八名)と、二九年三月に三菱鉱業全額出資の飯塚炭業株式会社が設立され、三菱直営となっていた飯塚(三六一名)でその数が激減する一方、麻生では五炭鉱合計一一八八名と、三倍超の増加となっている点である。

さて、鯉田を辞めたMは東京・大崎町の従兄弟に手紙を出し、「来たかったら来い」という返事を受けて東京へと向かった。が、大阪で所持金を使い果たした上、従兄弟との連絡が途絶したため、やむなく阪神地方に留まり、鋳物工、沖仲仕、土木、漁業などの職種を転々とするようになる(三六〜三七頁)。しかし、昭和恐慌の到来によって仕事がなくなり、また、「土方をしてみたり、荷あげをしたら〔…〕体わるうなつて」(同前)、筑豊炭鉱へ戻ることを決意する。一九二九年のことであった。Mが目指したのは、この時も鯉田であった。途中、門司からは所持金が尽きて徒歩となり、鯉田の「友達」のもとへとたどり着く。しかし不況の中、友達には「いやな顔され」、鯉田はおろかどの炭鉱にも就職はできず、折尾で土木・荷揚げ労働に従事することになる(三七〜四二頁)。

Mが筑豊へ戻り、三菱鯉田への再就労を試みたのは、まさに三菱

の各炭鉱で朝鮮人鉱夫が激減している最中であつた。技術的合理化の影響を受け、大手炭鉱が必要とするのは、旧来型の渡り鉱夫から、一定の教育があり、経営者や職員と共通する常識や行動様式を持つ鉱夫へと変わつていった。恐慌期の大手炭鉱では、高齢者・低能力者・勤務不良者・短期勤続者などが整理され、鉱夫の質的向上が図られたが、三菱では、朝鮮人についても、このような文脈において淘汰されていったことが指摘されている³⁰⁾。また、同時期に三菱による抜本的な改革が行われた結果、大手炭鉱と同様の内実を有するに至った飯塚でも、他の三菱経営炭鉱との同質性が強まる中で、朝鮮人の扱いについて他の炭鉱と同様の方針が適用されたものと考えられる。かくして、朝鮮人の三菱各炭鉱や飯塚炭鉱への就労機会は閉ざされていった。

折尾での一〜二カ月の就労の後、Mは麻生上三緒炭鉱の募集に応じて筑豊に戻ることになる(四二頁)。上三緒での仕事は仕練夫(支柱夫)で(一一頁)、坑内は「カマ場にはいつて蒸気のががる所にすわつたと同じ」ように暑く、「人が辛ばうしきらんげなああいうふうな個所をろんで、お前達ならできるけん、ちゆな風で「…」きつかった」が、「金は案外、昔の銭で「一日」二円とか一円八〇銭とかなり」、「あんころ、どげか悪い所は一円二〇銭とか五〇銭とか、そんなくらいにしかならんやつた」のに比べ、よかつたという(四三〜四五頁)。しかし、落盤事故に遭い、一〇〇日程通院(見舞金は出なかつた)することになつたのをきつかけに、一九二

九年のうちに上三緒を離れることになる(一一〜一三頁)。

ここには、渡航当初「働こうごとない」といつていた環境でもかざるをえないという、状況の変化が示されている。上三緒では、不況下にありながらも比較的良い賃金を得ていたようであるが、それは「人が辛ばうしきらんげな」過酷な労働条件の対価であり、彼は結局、事故によつて同炭鉱を去るのであつた。

Mはその後、遠賀郡方面の「小ヤマ」＝中小炭鉱を渡り歩くことになる。途中、麻生吉隈炭鉱に半年ほど留まつたものの、「まあもの二・三週間働いてみて、まあおもしろくないと思つたらもう晩方ゴソゴソと風呂敷につつんで」炭鉱を変える生活が、三四年まで続いた(二二・三・四六頁)。Mが最終的に腰を落ち着けたのは、三四年五月、知り合いを訪ねていき、棹取夫(運搬夫)として就労した麻生吉隈炭鉱である。彼が同炭鉱に留まることになつた最大の要因は、三五年、日本人の同僚の紹介で、同炭鉱の日本人鉱夫の娘と結婚(内縁関係で養子の形)したことであり、以後、ここで働くことになるのである(四二頁)。

昭和恐慌期以降、麻生とともに朝鮮人鉱夫が増加したが、中小炭鉱である。一九三三年の調査からは、いくつかの炭鉱についてその増減を確認できる程度であるが、中小炭鉱という範囲でより包括的に人数を把握できるのが、三四年四月末現在、福岡県内の大手炭鉱による経営者団体・筑豊石炭鉱業会所属炭鉱(及びその関連炭鉱)と、中小炭鉱の経営者団体・石炭鉱業互助会所属炭鉱(同前)

の鉦夫を比較した調査である。⁽³²⁾この調査によれば、前者の二五四七名に対し、後者では一一七六名の朝鮮人が就労していた。後者のうち、調査対象は炭鉦数で約五割、稼働者数で約六割に止まっていたから、⁽³³⁾中小炭鉦では判明している一一七六名以上が就労していたと推定され、二八年（四五三名）と比較した場合、朝鮮人鉦夫は大幅に増加していたとみられる。昭和恐慌期の中小炭鉦は、大手炭鉦を淘汰された鉦夫のプールと化し、同時期を通じて鉦夫の数はむしろ増加していた。⁽³⁴⁾朝鮮人鉦夫に関しても、中小炭鉦がその受け皿となったのである。

また、麻生や中小炭鉦における増加要因の一つとして、保護鉦夫入坑禁止への対処も想定される。鉦夫労役扶助規則の改正（一九二八年九月一日発布）にともなう保護鉦夫の深夜業・入坑禁止は、三年九月一日から実施されることになっていた。技術的合理化の進んだ大手炭鉦では、昭和恐慌期を通じて女性坑内夫の整理が進んだが、中小炭鉦では女性後山の整理が徹底されず、炭鉦業が活況を取り戻す三二、三三年以降は、女性に代わる労働力の確保が課題となっていた。⁽³⁵⁾

Mは、景気が回復し、中小炭鉦を軒々としていた頃のことを、「あんころほどこ行っても働けよったですもんね」（二〜三頁）と振り返っているが、以上のように、その範囲はもはや麻生や中小炭鉦に限定されていたのである。

最後に、かかる朝鮮人鉦夫の一九三〇年代のあり方と、内地への

定着化との関わりについて一言しておく、恐慌期以降に三菱や飯塚を淘汰された朝鮮人の中には、すでに家族形成を果たし、内地で生活の基盤を築いていた人々も多く含まれていた。移動を繰り返したMが吉隈に定着する契機となったのも結婚であったが、三菱では、⁽³⁶⁾二〇年代後半頃から長期勤続者、つまり定着層が徐々に増加しており、また、激しい移動が行われていた飯塚でも、三〇年には「朝鮮人鉦夫雇傭二件ヒ其ノ妻子ノ移住スル者多ク」⁽³⁷⁾という状況が生まれていた。飯塚を含め、三菱における朝鮮人鉦夫整理の方針は恐慌期以降も変更がなく、従ってこのような定着層の人々（その中には朝鮮人鉦夫を統轄する立場の世話方も含まれた）もまた、炭鉦から淘汰されることになった。他方、詳しい論証は他に譲るが、三二年八月に麻生商店経営炭鉦で起こった朝鮮人鉦夫による争議の際、家族持で就労時期がわかる争議参加者五五名中、就労して半年に満たない者が三〇名に上った。⁽³⁸⁾在日朝鮮人の家族形成は、まず男性が単身で内地へ渡航し、後に女性が呼び寄せられて家族を形成するのが一般的であったことを考えれば、⁽³⁹⁾三菱や飯塚に就労して家族形成をした人々が下方移動を余儀なくされた、というケースが想定されるのである。

ただし、恐慌期に三菱が朝鮮人の採用を止めて以降、麻生や中小炭鉦に就労した朝鮮人は、三菱や飯塚を淘汰された人々だけではなかった。具体的な分析はできないが、朝鮮人の内地定着化が進む三〇年代においても、新規の内地渡航者は増加し続けており、⁽⁴⁰⁾その

中には炭鉱での就労を希望するものもいた。⁽⁴¹⁾ また、福岡県での「密航」検査者も一九三〇年代を通じて増加傾向にあり、Mが経験したような「密航」は、三〇年代にはより活発に行われていたとみられる。麻生や中小炭鉱では、こうした人々を新たに採用していたと考えられる。

おわりに

以上、一九二〇年代と三〇年代との変化に着目しつつ朝鮮人鉱夫の存在形態を論じてきた。改めてまとめれば、朝鮮人鉱夫のあり方は各炭鉱資本の募集方法によって大きく規定され、そのことは新規渡航者を採用する炭鉱（主に三菱）から内地既住の鉱夫経験者を採用する炭鉱（飯塚・麻生・中小炭鉱など）への移動と、内地既住者採用の炭鉱間の移動という人の流れを生み出していた。また、炭鉱間での労働条件の差異も大きかった。しかし昭和恐慌期以降、三菱が朝鮮人鉱夫淘汰へと舵を切ったことで、その就労先は相対的に労働条件の劣る麻生や中小炭鉱に限定されていくことになったのである。それはMの体現するところでもあった。今後はかかる見取り図を踏まえ、炭鉱資本ごとの特徴や差異に着目しつつ、朝鮮人鉱夫の状況と変化を明らかにしてゆくことが課題となろう。

最後に、Mの足跡について述べておきたい。Mの行動様式には、筑豊を離れた前後で大きな変化があったとみられる。二〇年代、M

の移動には、より佳良な労働条件（具体的には三菱）を目指す志向が明確であった。しかし、阪神から戻り三菱への就労の可能性が絶たれ、さらに坑内事故に遭遇した後、彼が移動する動機は、その炭鉱が「おもしろない」から、というものに変わった。「おもしろない」理由は、必ずしも賃金など狭い意味での労働条件に限定されないもので、例えば、「あたしはしょっちゅう〔現場や労務に〕逆らうんですよ、もうやめさせすりゃええと思っちゃうから」（八頁）と、職員や上役との関係も、炭鉱を辞める理由になり得た。Mのこうした態度は、就労先が限定されてしまったなかでのある種の開き直りとみてとれる。しかし同時に、「相手が悪いと思うげな所には、ハナからそこには行かんです」（四頁）というように、中小炭鉱を渡り歩いて生きていくために、必要な術を身につけてもいった。また、昭和恐慌期以降、Mが交際した人々との関係について附言すれば、大阪から戻って後の出来事には血縁者が登場しなくなり、朝鮮人や故郷との関係は希薄化していったことが窺える。その一方、日本人女性との結婚が端的に示すように、日本人とのつながりは深化していった。このようなMの交友関係は、当時の朝鮮人全体からすれば特殊なものであっただろう。しかしそうであっても、Mが朝鮮人であることによって被る制約や差別を回避できたわけでは勿論なく、⁽⁴²⁾ Mを朝鮮人鉱夫としてのあり方から大きく逸脱させるものとはならなかったのである。

注

- (1) 佐々木信彰「在日朝鮮人の形成史」(磯村英一他編『講座差別と人権』四、雄山閣出版、一九八五年、二八～二九頁。
- (2) 金賛汀「火の慟哭——在日朝鮮人坑夫の生活史」(田畑書店、一九八〇年)、山田昭次「朝鮮人強制労働の歴史的前提——筑豊炭田を主な事例として」(『在日朝鮮人史研究』一七、一九八七年)など。
- (3) このテーマに関する研究史については、外村大「朝鮮人労働者の「日本内地渡航」再考——非準備型移動・生活戦略的移動と労働力統制」(『韓国朝鮮の文化と社会』七、二〇〇八年)、六二～六三頁を参照。
- (4) 西成田豊によれば、内地内での移動は大部分が同一府県内、時に府県間をまたいで行われ、三〇年代には定着化が進行したという(西成田豊『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」日本』東京大学出版会、一九九七年)、五〇～五四頁。
- (5) 樋口雄一『日本の朝鮮・韓国』(同成社、二〇〇二年)、六二頁。
- (6) こうした視角からなされた研究として、大阪・東成を舞台に、ゴム工業の展開と済州出身朝鮮人の定着化との関係を論じた杉原達の分析がある(杉原達『越境する民——近代大阪の朝鮮人史研究』新幹社、一九九八年、第四章)。
- (7) 西成田前掲書、一一三頁。
- (8) 坂本悠一「福岡県における朝鮮人移民社会の成立——戦間期の北九州工業地帯を中心として」(『青丘学術論集』一三、一九九八年)、一三六～一三七頁。
- (9) 福岡県には、日本最大の筑豊炭田の他、三池・糟屋・早良の各炭田が存在した。三井の単独経営である三池では朝鮮人を使用しない方針を採っており、糟屋・早良はいずれも小規模な炭田であった。
- (10) 『福岡県史』通史編近代産業経済二(二〇〇〇年)、三七六頁参照。
- (11) 福岡地方職業紹介事務局『管内在住朝鮮人労働事情』(一九九九年)、一四三頁。

朝鮮人鉱夫の動態に関する考察

- (12) 内務省社会局「鉱業労働事情調査」(刊行年不詳、『石炭研究資料叢書』二一、二〇〇〇年)、一五頁。
- (13) 福岡地方職業紹介事務局「坑夫雇備状態に関する調査」(一九二九年)、三三～三四頁。
- (14) 荻野喜弘「筑豊炭鉱労資関係史」(九州大学出版会、一九九三年)、三〇九～三一〇頁。
- (15) 外村大「在日朝鮮人社会の歴史的研究——形成・構造・変容」(緑蔭書房、二〇〇四年)、二七～三二頁。
- (16) 外村大「日本帝国の渡航管理と朝鮮人の密航」(蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、二〇〇八年)、三三頁。
- (17) 外村前掲「日本帝国の渡航管理と朝鮮人の密航」、四九～五四頁。
- (18) ここでは長広利崇に倣い、一九一四～三六年に存続する大炭鉱企業・官庁系炭鉱一七社等を除いたものを、中小炭鉱としておきたい(長広「一九二〇年代・昭和恐慌期の筑豊中小炭鉱」*Working paper series, Faculty of Economics, Wakayama University*, 8-5, 2008)、二頁。
- (19) 丁振聲「一九二〇年代の朝鮮人鉱夫の使用状況および使用経費——筑豊地方の三菱系炭鉱を中心として」(『日本史学集録』一〇、一九九〇年)、三二頁。
- (20) この問題については、荻野前掲書、二七九～二八八頁、西成田豊「石炭鉱業の技術革新と女子労働」(中村政則編『技術革新と女子労働』東京大学出版会、一九八五年)を参照。
- (21) 西成田豊「労働力編成と労資関係」(一九二〇年代史研究会編『一九二〇年代の日本資本主義』東京大学出版会、一九八三年)、一七六～一七八頁、荻野前掲書、二六二～二七九頁を参照。
- (22) 前掲『管内在住朝鮮人労働事情』、一〇五～一〇九頁。また、丁前掲論文、三五～三六頁。二八年二月における一日平均賃金(採炭夫・出来高制)は、三菱炭田の二・〇七円を筆頭に、中島飯塚一・九〇円、麻生網分一・八〇円、同芳雄一・五二円、同吉隈一・五〇円などとなっていた。

- (23) 前掲『管内在住朝鮮人労働事情』、一三二頁。
- (24) 前掲『管内在住朝鮮人労働事情』、一三〇～一三二頁。
- (25) 委託経営のもとで長壁式採炭法や水流切羽運搬法が導入され、この時期に女性坑内夫数も大幅な減少をみたことが確認される(麓三郎『三菱飯塚鉱業史』一九六三年、八七～八八・一一一～一二二頁)。
- (26) 前掲『管内在住朝鮮人労働事情』、一三二～一三三頁。
- (27) 前掲『管内在住朝鮮人労働事情』、八三～九一頁。
- (28) こうしたネットワークが乏しかったと思われる事例として、例えば、一九三八年に内地へ渡航し、筑豊の海老津炭鉱に就労したある人物は、海老津のすぐ隣ぐらいいにしか考えず、夕張炭鉱の募集に応じた、と述べている(林えいだい、『強制連行・強制労働』現代史出版会、一九八一年、一一一頁)。
- (29) 福岡地方職業紹介事務局『炭坑夫の出身地調査』(一九三四年)、六～一〇頁。
- (30) 市原博『炭鉱の労働社会史』(多賀出版、一九九七年)、一五八～二六四頁。
- (31) 市原前掲書、二二一～二三四頁。
- (32) 越田久松『福岡県に於ける炭鉱稼働者の種々相』(一九三六年、九州大学図書館所蔵)。同書の調査は、著者である越田が福岡県庁警察部健康保険課に在勤時代の三四年五月、同課が県内一二一炭鉱に対して調査表を送付し、回答のあった七九炭鉱の結果をまとめたものである(同書「序言」)。なお、ここでの大手・中小の区別は、先の長広の区分ともおおよそ対応している。
- (33) 越田前掲書、「序言」。なお、大手炭鉱の調査対象は炭鉱数・稼働者数の約九割に及んでいた。
- (34) 市原前掲書、一六六～一六七頁。
- (35) 西成田前掲『石炭鉱業の技術革新と女子労働』、九八～九九頁。
- (36) 丁前掲論文、四二頁。
- (37) 百武辰二『飯塚炭鉱第一坑及第三坑報告』(一九三三年、九州大学文書館所蔵)、六頁。
- (38) 争議参加者の名簿類(林えいだい監修『戦時外国人強制連行関係史料集 II 朝鮮人一上巻』明石書店、一九九一年に所収)の検討に基づく。
- (39) 外村前掲書、九一頁。
- (40) 外村前掲書、九四～九六頁。
- (41) 例えば、三五年二月に内地へ渡り、当初滞在した久留米では職が得られなかったため、麻生吉隈炭鉱に就労した者もいる(権載玉『アボジ——傘と繋いだズボン』(朝鮮青年社、一九九四年)、一四九～一五二頁)。
- (42) 外村前掲『日本帝国の渡航管理と朝鮮人の密航』、四九～五四頁。
- (43) 聞き書きには、自身や、Mと一緒にしたこと、結婚相手が受けた差別についても触れられている。また、戦時期のMは、労働力動員された朝鮮人「寮生」を管理する立場となる。
- (追記) 本稿で使用した資料の来歴確認については上野朱氏、田中直樹(日本大学名誉教授)、三輪宗弘(九州大学教授)に大変お世話になりました。ここに記して深甚の謝意を表します。